
ss Story`s ~ Another World`s/Cross Greeed`s ~

MUGEN KAI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

OOO Cross Storys \ Another World、s / Cross Greed、s \

【Nコード】

N9001X

【作者名】

MUGEN KAI

【あらすじ】

欲望が交わりし地、ミッドチルダ。

ここに、欲望の使徒達が、なにかに呼ばれるように集結した！

ある者は正義のため、ある者は救済のため、ある者は真偽を確かめるために・・・。

ここに、OOOの異世界戦記が始動する！！

この小説を読んでいただく前に、「純正なる正義の使徒 異世界・

飛蝗の跳躍」「救える手」を求める欲望 異世界・恐竜の奔走」
「悲しき救世主と欲望達 異世界・青年の終わりのなき旅の続き」の
続編となっているため、この短編群を讀んでいただくことをお勧め
します。

N e x t O O O N o w L o a d i n g ｝ C o m e O N ! O O O

この小説は仮面ライダーオーズのI F E N Dの世界×魔法少女リリカルなのはS t r i k e r sのクロスオーバーのF F小説となっています。

基本一定量更新した後は一カ月〜二ヶ月に一回の更新となる・・・はず、だよね？自分？

この小説を読んでいただく前に、あらすじ欄で述べてある作品群の続編であるため、それらの購読をしていただくとありがたいです。

OOO これまでのダイジェスト！

800年前、欲望により作られしメダルの異形、グリード。

グリードにより作られし、ヤミー。

グリードの核となっているコアメダルを使いし者、オーズ。

人間とグリードによる欲望の戦い・・・それは、オーズの器である火野映司によって終結、映司は後ろ髪を引っ張られる感覚を覚えながらも、グリードらと一緒に、クスクシエの面々から姿をふつりと消した。

その裏で、ミッドチルダで起こった3つの出来事！

1つ！

一枚のセルメダルから復活したバッタヤミーは、とあるバスジャック事件から始まり、ミッドチルダの悪を、直感のままに懲悪していく！

2つ！

砕かれたはずの紫のメダルから生まれた紫のグリードは、とあるデパートの爆発事故に遭遇、自分の存在理由を探しながら、事故に巻き込まれた1人の少女はじめの多数の人々をグリードの力によって助けた！

3つ！

旅の途中、鴻上からミッドチルダの存在、そしてそこにある都市伝説を聞き、その真偽を確かめるため、火野映司ら一行、伊達明がミッドチルダに降り立った！

バッタヤミー、紫グリード、火野映司はじめグリード一行、伊達明、
そして機動六課。

異世界での交わりは、新たな物語へと!!

u b e N e x t C o m i n g O O O ! ! C a n y o
b e H E R O ?

この日、19歳のうら若き女性が、広い部屋で1人頭を悩ませている。

ここはミッドチルダの中心地から少し離れた、機動六課の隊舎。

さらに言うならば、この女性、八神はやてが1人頭を痛ませている場所は、部隊のトップが居座る機動六課部隊長室、言いたいことをまとめるならば、この妙に広い空間、映像に目をやりながら眉間にしわを寄せているこの人物、八神はやてが、ここ機動六課のトップに立つ人物であることを言いたい。

機動六課・・・約一カ月前に起こった、次元史に残る大規模な事件、J・S事件。

この事件の解決に大きな一役を買い、文字通り多大な活躍をし、ミッドチルダに大きく名売れた存在、それが、ここ古代遺物管理部の六課・・・機動六課である

ここの隊舎、実を言うならば、少し前まではただの瓦礫群であった。要因としては、もちろんそのJ・S事件における被害で、J・S事件の爪跡でもあった。

しかし、名が売れ、管理局本部も機動六課の働きに評価を示したためか、この部隊舎の修復が町の復興よりも優先されてしまい、こうして一カ月という短期間で元通りとなってしまう現実がある。働きに評価していくれていることはありがたいが、町の復興より優先されていることを聞いたときは、大いに八神はやて他隊長陣一行が文句を言っていた、という閑話もある。

ともかく、この完璧なまでに修復された部隊舎の部隊長室で、はやては先ほどから大いに頭を悩ませていた。

J・S事件、という大仕事が片付き、その多大な事後処理も、だんだんと落ち着いてきたこの時期、本来ならばここまで苦悩することはないのであろう。

がしかし、彼女をはじめとした管理局の仕事は、あくまで「次元世界の平和と秩序を守ること」。

こういった仕事に関しては、平穩など約束されていないものである。実際問題として、ここ最近、特に2週間前から、ミッドチルダで異変が起きている実情があるのだから。

異変・・・それは、ミッドチルダで広まっている、とある都市伝説。

「人々が悪に対し助けを求めたとき、緑の化け物が、雷撃と跳躍により、完全なる懲悪を行う。しかし、悪の者は、無事では済まされぬ。」

「人々が救いを求めたとき、骸の異形が、その翼、その怪力、その氷結の息によって、無条件の救いの手を差し伸べる。」

ミッドチルダに突如現れた謎の異形、魔法生物の類でもなければ、魔法で変身した人間でもない。

まさに未確認、アンノウンが2週間前に出演したのだ。

これを聞いた人ならば、大体多数の人は「ただの都市伝説」だとあしらうであらう。

だが、実際に目撃した人が多数おり、映像にも残されているのが現実であり、存在が証明されつつあるのが今の現状。

そう断言できる要因・・・それは、機動六課のFWメンバーそれぞれが、その特徴にぴったりの異形と出会っているのだ。

まず緑の化け物・・・これは、ライトニング分隊のエリオとキャロが出会っている。

休暇、とある娯楽施設へと出発していた2人に、突如バスジャック

の魔の手が迫り、目的であるキャロの誘拐遂行の寸前に、その異形が介入、その一味を退治した後に、異形はどこかへと逃げて行ったらしい。

その後、ミッドチルダの都市部を中心として、泥棒から始まり大規模な強盗まで、その異形が介入、解決している。

これを聞いて、誰かが思うであろうか・・・まるで「正義の味方」みたいだと。

実際、遭遇したエリオとキャロも「まるでキャロを助けに来たようであった」と発言しており、実を言うならば、その異形のとある口癖が確認されてあるのだ。

「悪い奴は・・・許さない。」

その行動、その言動、まさに地球のアニメや漫画でよく見る「ヒーロー」。

映像で確認されてある姿だけでは想像できないのだが、そういった実情がある以上、まさに「正義の味方」といっても過言ではないのか？とはやては疑問を抱いている。

もう一方、骸の異形・・・これは、スターズ分隊のスバル、ティアナ、プラスとしてスターズ分隊の隊長である高町なのはが保護している子供、ヴィヴィオが遭遇している。

こちら、同日の休暇、とある新興企業のデパートにやってきた3人が、そのデパートの爆発事故に巻き込まれた時、その異形が介入、ヴィヴィオを2人の元に送り返し、それにとどまらず、大規模な氷結魔法によってデパートの火事を鎮火、多数の人々を救出した後に、管理局の到着を確認した刹那、その場を去って行ったらしい。

とはいったものの、実を言うならば、その異形が行った広範囲の氷結作業、魔法を使った、ということの確証がなく、謎の力によってのもの、と予想されている。

しかし、その規模、氷結の時間を考えるならば、魔力に換算する場合、少なくともA A A、下手をすればSオーバーはくだらないだろう、と予想されている。

その後、ミッドの郊外を中心として、事故や事件から人を守っている異形の姿が確認されている。

こちらは、正義の味方、というよりは、一般的に言われる救助隊員の働きに近い。

実際、事故や事件の現場から救出された人々、そしてスバル、ティアナ、ヴィヴィオは口をそろえて「ほんとに他の人のことを心配してそうで、声だけは、優しそうな男のものであった」と発言している。

この2人の異形によって、ここ最近の事故、事件による死亡者や負傷者が激減、犯罪者の検挙率が大幅アップ、管理局の仕事が大幅に激減している。

つまり、管理局の大多数の局員によって行っている仕事以上の仕事を、その異形2人だけで行っている現実があるのだ。

聞くだけでは大助かり、という印象を受けるであろう。

だが、その2人は異形、いくら善業を行っていても、こちらはその存在に対し、調査し、警戒しなければならぬ現実がある。

正直、異形によって助けられた人の発言を聞いているせいか、どうもその異形には悪いことをしている、という少々の罪悪感が拭えない。

だが、その異形の正体が、どこかの研究所が作った生体兵器などであつたら、ミッド全体が危険にさらされる可能性がある以上、そして、管理局としての仕事である以上、はやては隊を統括するものとして、非情に、毅然であるべきなのだ。

一旦異形に関してのデータ資料を見た後に、はやては新しい2つの画面を展開した。

まず、今日の異形の活動状況に関してのMAP。

異形が力を発揮したり、出現した場合には、その地点に詳細不明のエネルギー反応が感知されることを利用したものだ。

おかげで、ある程度異形の活動状況、発生状況をつかむことはできたのだが、その地点に足を運んだ時には、とつくに異形の姿は無く、あるのは事件の犯人であつたり事故の現場から救出された人であつたりする。

今日も、ひったくり犯の2人が、足を凍らされて拘束されていることが起こり、現在、その2人から異形についての情報を聞き出している最中だ。

もうひとつは、その異形についてのもっとも身近な情報源の写真だ。3日前、異形の現れた現場に落ちていた、一枚の銀のメダル。

分析の結果、魔力でも科学的なものでもない謎のエネルギーの圧縮されたもの、という結果が出ており、現在メダルのさらなる分析を行っている。

「はぁ・・・、まだまだやることは山積みや・・・。」

少々元気がない、はやてのため息交じりのつぶやきが、広い部隊長室に少しばかり響いた。

同時刻、今の時間は一般的に言われるランチ、昼食の時間だ。

機動六課の食堂も、時間に反映して一層と人が多い様子で、たび重なるデスクワークに疲れを表した顔をしている者や、今日のランチはなににしようかと小難しそうな顔をする者など、十人十色の赴きだ。

その中に、これまたハードな実技訓練を終わらせ、いかにもな様子でやってきた4人、紛れもなく、FWメンバーの4人、スターズ分隊のスバルとティアナ、ライトニング分隊のエリオとキャロだ。

この4人、特にスバルとエリオは、機動六課で一番の大喰らいで有名で、この2人にかかれれば10人前の料理がいともたやすくなくなってしまう。

今日も、こぼれそうな大皿に盛られた人外な量のミートスパゲッティを持ち、4人はもはや指定席となつたいつもの場所の、いつもの席順で座り、おもむろに食事を始める。

言葉だけ聞けば、これがいつもの光景なのだろう、と予測できるであろうが、ここ最近での変化が生じている。

それは、この4人プラスこの4人のそばに座り、オムライスをはおばっているヴィヴィオの中にある気持ちだ。

まず、エリオとキャラ、キャラの心の中では、ある後悔の念が渦巻いていた。

それは、「あの異形に、助けてくれてありがとうと言えず、目の前で怖がってしまった」ということ。

キャラはとても純真で、何よりも優しい心の持ち主だ。

キャラの得意とする支援魔法は、その性格が具現化されたのごとく、FWメンバーに温かい守りと力を与えてくれており、その性格が竜の使役につながっているのかもしれない。

そんな心の持ち主である彼女にとっては、そのことにとっても後悔しているのだ。

自分が怖い大人たちに連れ去られようとしたとき、颯爽と現れた緑の異形、その異形は彼女を魔の手から守り抜き、バスにいるエリオまで丁寧に運んでくれた。

だが、それに相反し、先ほどまで置かれていた状況も相まってしまったためか、キャラはその姿、その力に、心の底から恐怖の念を覚えてしまったのだ。

助けてくれた恩人に対しての気持ちではないことは重々に承知、だからこそ今まで後悔し続けている今がある。

エリオも同じようなもので、自分が守れなかったキャラを、傷一つ

つげずに運んでくれた相手に対し、槍型デバイスのストラーダを向け、完全に敵意を表してしまった自分に、あの行動は本当に正しかったのだろうか、自分にはほかにやるべきこと・・・感謝することがなぜできなかったのだ、と自問の螺旋状態となっているのが現状。

炎が迫り、瓦礫が落ちてきた状況で、体を張って助けてもらったヴィヴィオも、キャロとの心境が似ているであろうか。

彼女も、幼子らしい純粹さと優しさを持ち、なにより人の温かさを知っている人物。

あの骸の異形は、自分をまるでパパのごとく心配してくれて、さらにはあのデパートの人々全員すら助けてくれた。

しかし、あの異形が優しき異形だと分かったはずなのに、自分はその姿に悲鳴を上げそうになり、助けを請おうとすら思ってしまったのだ。

あのように、自分は数々の人々に助けられてきた、だからこそ、感謝の大切さも重々に知っている。

だが、あの異形にだけは、自分は感謝を伝えられず、拒絶の意を少しでもあらわにしてしまった。

姿が違うだけで判断するなど、自分の中では持つての他、だが、あの時、自分は外見の恐怖だけを感じ取り、視野を狭めてしまったことに、後悔が渦巻く一方なヴィヴィオであった。

スバルとティアナ、特にティアナに関しては、あの異形の力へと畏怖と、あの異形への疑問、あの時の異形の様子から感じる優しさを信じたい気持ちたちが混沌を形成している。

年長者であるために、自分達は冷静に状況を見なければいけない、それはあの異形にも同じだ。

しかし、あの異形の人間臭いしぐさ、言動、人間以上の人の安否への執着を見ると、そんな疑念など吹き飛んでしまいそうだ。

しかし、あの6階建てのデパートを、一瞬にして凍らせてしまった

力、普通の魔導師以上の速度を持つ飛行能力、目撃証言から推測した怪力、それを考えると、どうしても異形としての畏怖、疑念が払えないのが現状、平和と秩序を守る管理局員としての判断であろうとティアナは考える。

スバルに言ったつては、ティアナと同じ思考をしていながらも、どちらかと言えば異形に対して一定に信頼を持っている心境だ。

管理局員より速く現場に赴き、人をいち早く助ける様は、自分の理想としているスタイルに準ずるもの、話によれば、一般的な魔力を持つ管理局員が行けないような場所に、必死に行こうとし、人を助けてたい一心でいる骸の異形や、事後処理に追われ、ガサ入れをできずに放置気味となっている犯罪組織の本部に、単独で突撃し、組織を壊滅させた緑の異形が確認されており、その雄姿は、スバルが考える管理局員のあるべき姿の鑑であるからだ。

若いがために迷うのは若い者の特権、それは、それだけ迷う時間を持てるころにあるからだ。

その食堂、4人のような気持ちを抱いている者はこの4人だけではない。

4人の少し離れた場所で、ゆっくりなペースでチャーハンを食べているヴィータ、その横でその体にとってはかなり大きいパンを、その小さな口でほおばっているリインフォース？も異形に遭遇したことがあるのだ。

質量兵器の取引が行われている、と通報を受けたのは4日前。

詳しい内容は、ミッドのとある港で、大量の質量兵器の取引が行われそうだとあるフリーの記者が通報し、それを詳しく調べようと、その取引日に、ヴィータ、リインフォース、シグナム、ザフィラといったヴォルケンリッターの前線メンバーが張り込みを決行した。

その夜、その情報が皮肉にも大ビンゴ、実際に、船に積まれた質量兵器らしき木箱を運搬している集団を見つけ、機を見計らったところで、4人による取り押さえを行った。

もちろんだ、といっているがごとく、その集団はデバイスと、質量兵器である拳銃やマシンガン武装し、4人に対抗した。

犯人の一味は50人前後、最初は20人前後かと思われた戦力であったが、一味は万が一のことも考え、用心棒集団を忍ばせてあったのだ。

用心棒、と言っているからには、それなりの実力があり、炎の変換資質を持つものや、魔力弾に長けているもの、剣に長けているもの、アームドデバイスを持つ格闘に長けているものなど、一者一葉な戦力であり、それないな実力、魔導師が苦手とする質量兵器を行使されたせいか、4人は苦戦を強いられた。

そして、その事態は、不足に起こってしまった。

仲間の1人であるリインが、不意を突かれユニゾンされる前に人質として拘束されてしまったのである。

リインは、魔力はそれなりにあるものの、どちらかと言えば支援を得意とする融合騎、それゆえに不意を突かれれば拘束など簡単であった。

事前にユニゾンを行っていたれば・・・とヴィーター一行は後悔しながらも、人質の存在によって攻撃ができず、防戦一方の不利な展開。増援を頼む方法はないか、と3人が思考していた、その刹那であった。

リインがバインドによって拘束され、一味のリーダー格の存在が拳銃を向ける中、不意に、拳銃を持つ手めがけて緑の電撃が走り、その電撃は拳銃を高熱によって破壊、その後たじろいでいる犯人をよそに、刹那、リインに施されているバインドが破壊され、音速のごとく紫の影がリインを助け出したのである。

いきなりの襲撃に、一味は「管理局か！」と動揺するが、それらの行動を起こした犯人の姿を見た瞬間、一味と、それらと交戦してい

たヴィーター一行、助けられたリインは戦慄した。

一体は、緑の装いを持ち、人型に緑の皮膚を植え付けたような姿、その姿は、ヴィーターが地球で見たバッタに似たものがあつた。

もう一体は、頭は化石の骸、超速飛行によってリインを助けた名残か、背中には大きく広げたしなやかな紫の翼、その装いはまさにバフォメットの異形。

裏社会で一気に広まり、恐怖を知らしめた都市伝説。

「人々が悪に対し助けを求めたとき、緑の化け物が、雷撃と跳躍により、完全なる懲悪を行う。しかし、悪の者は、無事では済まされぬ。」

「人々が救いを求めたとき、骸の異形が、その翼、その怪力、その氷結の息によって、無条件の救いの手を差し伸べる。」

その都市伝説に伝えられている特徴にぴったりとあてはまるその姿、現場にいるもの達は理解する、そうか、これが都市伝説の存在だ、と。

「あのく、この子の味方って誰ですか？」

「・・・私達だ。」

そう返事したのはシグナム、といっても、友好関係を築こう、という雰囲気はなく、他の2人も臨戦態勢をその異形2人に向けている。一色即発、その異形の姿をみたものは、その行動には納得できるであらう。

だがしかし、外面だけで判断したことを、現場の人たちは知ることとなるのだ。

「この子、腕に怪我をしてるんで、治療してやってください。でも、無事でよかったです。」

「お前たちは逃げる。ここは俺達に任せてくれ。」

「・・・はあ？」

要約するならば、また誰かが怪我をする前に、ここから安全な場所まで言ってくれ、ということだ。

怪我を心配そうに見ている骸の異形、こいつらは任せてくれ、とためらいなく胸を張った緑の異形、その姿からは想像できない自分たちへの配慮に戸惑いを見せるヴィーター一行、しかし、判断の時間はないらしく、一味はその異形に一斉攻撃を仕掛けようとしている。

それに気がついた緑の異形は、リインを丁寧そうに持ち、その自慢の跳躍力でヴィーター一行に接近、警戒を続けている一行をよそに、任せたと一言残しヴィーターにリインを預け、また跳躍によって一味の布陣に突撃した。

その様に恐怖を覚えたためか、はたまた焦りか、一味は一斉に異形2人に攻撃を始めた。

・・・が、その対立は圧倒的であった。

飛び交う魔力弾、斬撃、炎、それに戸惑いや臆病を感じさせず、むしろ余裕すら感じさせる様子で、異形達は攻撃を跳ね除け、一味をなぎ倒していく。

ヴィーター一行がなにより驚いたのは、異形に質量兵器が効かないことであった。

奥の手として使用したマシンガンや拳銃、しかし、異形は被弾をしても動きを少々止めるだけで、まったくダメージとなっていない様子であったのだ。

緑の異形はその脚力と跳躍力を駆使し、格闘を主として一味を倒していく。

骸の異形は氷結の息と飛行能力によって、飛行によって攻撃をかわしつつ、氷結によって生成した氷の弾丸や、紫のエネルギー弾を一味に飛ばし、倒していく。

その様はまさに地球の時代劇のごとくばったばったと行われ、気がつけば5分足らずで一味は全滅していた。

しかし、ヴィーター一行の仕事はまだ終わっていなかった。

「その2人！助けてくれたことには感謝する。しかし、あなた達には少々聞きたいことがある。・・・任意同行、で済みたいのだから。」

とシグナムはデバイスを一旦下げ、こちらに交戦の意思はない、といった意思表示を行う。

といっても、デバイスを下げたのはシグナムだけで、万が一、ということでヴィータとザフィーラは臨戦態勢でいるが。

だが、異形の返事は早かった。

「あー・・・そのー・・・ごめんなさい！」

「すまぬ。」

と異形2人が頭を下げると、骸の異形は翼を一気に広げ、周辺に強風を発生させる。

それで少しばかりシグナム一行がたじろいだ瞬間、異形の行動は早かった。

骸の異形が緑の異形を抱え、目にも止まらぬ速度で空へと飛び上がり、遠くへとその闇に姿を消してしまっていた。

その行動は一瞬、その様に、改めて異形の力を感じたヴィーター一行は、様々な疑問を持ちつつ帰還するのみであった。

その日の緊急会議、もちろん内容は密輸事件と異形の出現について。そして、ヴィーター一行から聞いた異形の特徴から、異形の識別コードネームが決定されたのである。

緑の異形・・・「アンノウン未確認1号」グリーン・ホッパーHopper」

骸の異形・・・「アンノウン未確認2号」パープル・スカルSkull」

それらの決定は、機動六課が本格的に未確認についての調査を行うことを証明するものでもあった。

Count The Storys 1

異変と出現と始動

#2 (前書き

結論

バッタ&mp・紫マジロー

日の光が輝き、人の心をなにかに誘うような今日の日。

そんな日にはどこかにぎやかさを感じるもの、特にミッドチルダの都市部のような人の交通が多い場所であつたらなおさらだ。

しかし、太陽とは相反に、まったくの人の気配を感じさせない一帯、ビルは形をとどめているだけのモニメントと化し、まさに「捨てられた街」。

ここはミッドの北部に存在する、通称「廃棄都市」、正式名称「廃棄都市区画」。

この時期を考えると5年近くとなるであろうか、臨海第8空港で起きた大規模火災、ロストロギア「レリック」の存在が原因となり、すべての始まりの一端であつた事故。

その事件によつて問答無用に空港は閉鎖に追い込まれ、その近隣は余波によつて廃棄された。

ここは、その際に廃棄された一角、いわば事故の爪跡であり、改めてロストロギアの危険性が再確認された証明でもある場所なのだ。廃棄、という言葉は皮肉にも適切で、かすかに下水道機能が生きているだけの、ただの抜け殻。

人の出入りなどあるはずもなく、あるのは風の吹き抜ける音とその合間に強調される沈黙の一種である。

・・・だが、とある廃棄ビルの屋上に耳をよく傾け、澄ましてみると、不意と拳や蹴りが空を切り裂く音が聞こえるのだ。

声は無く、ただただ拳、足が空間を射抜き、時折にボディに強く打ちつけられる音も見受けられる。

音とテンポから予測して、おそらく格闘の練習などでもしているのであろうか、音の強さと刻みから、よほどの力と技量を見受けられる。

実力者ならば一目見てみたい、とバトルマニアの人物なら考えるであろうが・・・その音の正体、音を発している犯人の姿を見た瞬間、大部分の人物らは戦慄するであろう。

拳と蹴りを繰り返している人物、否、異形、その姿は骸を象るバフオメツト。

もう一方の異形、その拳と蹴りを受け身している姿、緑を基調とし、バツタを象る人型のなにか。

その姿は、緑の異形が、骸の異形に格闘を教えている最中なのだ。骸の異形がかなりの圧のかかった格闘の動作を繰り返すも、緑の異形はその跳躍力と脚力、基本的な筋力を駆使したフットワークで回避を繰り返していく。

時に緑の異形のボディに拳や蹴りが撃ちつけられる時がありながらも、基本的には大きいダメージはなく、これぐらいのものなら慣れている、といった様子だ。

その時間、一時悠久なものかと感じることもあったが、終わりの時は必ずやってくるものである。

お互いに距離を取りあい、これまたお互いに大きく一礼、これらが終わりの合図なのである。

異形らはお互いに向き合い、静かに傾き合うと、2人は外の景色に視線を預けながら、おもむろに今の状況、および進歩の度合について語り合った。

「この短期間でかなり進歩してきたな。」

「いやいや、やっぱり格闘に関してはあなたには・・・。」

「それはお互いの特性の違いがあるからだ。君には私よりも大きな力を持っている、すぐに私を追いぬくさ。」

そうして、緑の異形は静かにサムズアップ、骸の異形もそれに返し

た。

この2人の異形が邂逅したのは、1週間前、お互いにこの世界で生を受けてから1週間が経過した節目の時のことであった。

ミッドの郊外、そこにあるとある研究機関の発掘現場で、岩盤沈下による生き埋め事故が起こったのだ。

生き埋めにあったものは12人、幸い死者はなかったものの、そのまま1時間経過したならば12人全員窒息によって死亡する状況、さらに地形上唯の地上からの出入り口も余波によって塞がり、管理局の救援にも時間がかかる、まさに頭を悩ませる状況に置かれた、その時であった。

自慢の跳躍力によって地形をもろともせず、緑の異形がその助けを実行すべくやってきたのだ。

偶然近くにいたところに聞こえた轟音、それを聞いたとき、自分のなかにうごめいている正義の理念が、刹那の時も待たずに体を動かしていた。

この場所にやってきたからには、自分は人を助けるべきだ、と早速と生き埋めの人々を助けようと行動に移す・・・ところなのだが、異形は状況を冷静に分析していた。

この状況で考えられるプランは、自分の雷撃によって岩石群を粉碎すること、だが、少しの刺激で岩盤が再び沈下する、または決壊するのではないだろうか、という可能性が考えられたのだ。

しかし、自分は格闘に自身は少々持っているが、岩石群を粉碎するほどの脚力は無い、故に八方ふさがり、もはや手詰まりかと思われた、その時であった。

不意と、太陽光を一瞬にさえぎる空の影、大きな翼をはためかせ、かなりの速度でこちらに向かってきている。

その影は、背中に光を浴びながら、対照的に地面に接近してきたときはゆっくりと、その翼を動かし、まわりに心地よいぐらいの風圧

を発生させ、その影はこの地に降り立った。

頭は骸を象り、背中にはしなやかな翼、体に見受けられる異形の様は合成獣、紫を基調とした様、そう、ミッドの裏で広まっているもう一つの都市伝説の存在、骸の異形だ。

お互いに近くにいたために、気配を感じた異形2人はその気配に目を配る、その時、お互いに強く感じたのだ、自分と同じような存在、同族に近いものだ、と。

人間から見ればとても人懐っこい性格をしている骸の異形は、その姿にまったく尻込みせず、初めまして、と軽く一礼。

それを見た緑の異形は、相手に戦いの意思はない、と悟ると、無言で軽く一礼を返す。

その刹那、お互いにこの場所にいる理由、お互いがなにを成すためにここにいるかを感じ、緑の異形が提案した。

それは、自分の雷撃で岩盤を壊したいのだが、決壊の可能性がゆがめないで、なには解決策はないか、という質問に近いもの、骸の異形はその問いに頭を捻り、少々のシンキングタイムを取った後に、異形は思いついた。

善は急げ、と骸の異形は提案を述べる、それは、自分が周りの岩盤を、自分の氷結の力によって固めて、できるだけ決壊は防ぐから、その間に岩盤を破壊してほしい、というもの。

緑の異形はその提案に文句は無く、納得の意を表すように大きくうなずくと、骸の異形も大きくうなずき返す。

お互いにこの日が初対面、どれだけの力量があるかわからない、だが、自分達が同族だ、と直感で感じたときから、お互いに一定の信頼を置いたのかもしれない。

決断からの行動は早く、すぐさま骸の異形は力を解放、大きな咆哮を上げると、まわり一帯が氷の世界と化した。

その様になるまでは一瞬、その力量に、やはり間違っではないなかった、と緑の異形が心で納得、その後、時間を置くことなく緑の異形は生き埋めの要因となっている岩盤を雷撃と骸の異形によるエネルギー

ギー弾によって破壊、その空間の先から12人の人達を視認した。

その後、緑の異形はその跳躍力で、骸の異形はその翼による安定した飛行によって、12人達を無事な場所まで送り届けると、一端、2人はその場から離れ、お互いに顔合わせを行った。

お互い、自分の直感、自分の中にある「欲望」によって動いている、いわば人助けを行っていること、自分はなんでこの世界に生きているのか分からないこと、お互い今までなにをしてきたのか。

その話をしていく後に、お互いに同じような理念で動いていることに親近感を覚え、骸の異形が一緒に行動することを提案したのだ。

その提案には、緑の異形も賛成の意を露わにしていた。

緑の異形は、ここ最近自分の力に及ぶ限界を感じており、このままでは完全なる理念の遂行ができない、と危機感を覚えていた最中、実際に今回の件においても、おそらく骸の異形の協力がなければ遂行できなかったであろうから。

それを考えた緑の異形は、快く協力を容認、その瞬間から、ミッドチルダの都市伝説コンビが結成されたのだ。

なぜ緑の異形が格闘を教えていたかというと、共闘していくうちに、骸の異形が自分の格闘経験の無さに気づき、緑の異形にノウハウを軽く教えても立ったのがきっかけ。

その後、興味があるならば自分が教えられる範囲で教授しよう、という緑の異形の心遣いによって、廃棄都市に根城を置き、こうして毎日のように拳を打ちあっているのだ。

風が静かに吹き抜け、それに緑の異形はやすらぎをかすかに感じている、その時であった。

2人の聴覚、そして、自分の中にある感覚、人の感情、欲望の抑揚を感じ取ることのできる感覚が、不意と感情の高ぶりと欲望の増幅

を感じたのだ。

このパターンは覚えがある、おそらく、都市部のどこかで何かの事件が起こっている、感情の高ぶりと欲望の増幅は、その犯人のものである、と悟る。

異形らの決断は早く、お互いに大きくうなずき合い、これからの行動をお互いに認識する。

自分の中にある理念、唯にある欲望のために、異形2人は、緑の異形はビルとビルとの間を跳躍によって移動し、骸の異形は翼を大きく開き空を翔ける。

こうして、また1つの正義が為されていく、それがここミッドチルダの日々となりつつあるのだ。

ミッドチルダの科学は、地球とは違う方向性ながらも、一步先をいったものである。

発達した通信技術もその例で、地球ではカメラとカメラを通したテレビ電話、というものが存在するが、ミッドの通信端末、地球で言う携帯電話は、もはや画面を通して顔を合わす通信など当たり前で、地球以上にマルチタスクな面も見受けられる。

もちろん、純粋な地球人である火野映司と伊達明は、そんな高性能な科学に触れるのは初めてであり、鴻上から端末を渡された時は関心の声を上げていた。

そして今、その性能が発揮されるときで、火野と伊達、そして火野に憑依しているグリード一行は、地球にいとある人物と連絡を取り合っていた。

比較的スレンダーな体型、トレードマークのごとく定着してしまった黒い服と、左腕に指定席を置いている小ぶりな人形、通称「キヨちゃん」が画面に視線を向けており、それと比例するかのよう、その人物もキヨちゃんに対し常に外さない視線を送っている。

画面を介して話すのであれば画面に視線を向ければいいのでは？と一般人は思うであろうが、これが彼、真木清人のスタイルであり、一番の特徴でもあり、正直、ネックでもある。

『どうでしょうか？グリード達、なにより、火野映司君自身の様子は。』

「こっちは基本変わりませんね。みんないい子ですよ。」

火野が定期的に連絡を取り合っていた唯の人物が真木で、それはお互いに体の状況を確認するためのものでもあり、居候の様子を確認する行動でもある。

彼、真木清人も紫のメダル保持者であり、常にグリード化の危険を背負っている、火野と同等の立場にいる唯の人物、また火野以上にデータの面でグリードについて詳しい人物でもある。

『グリード達はまだしも、一番危険なのはあなた自身ですよ、火野映司君。私が3枚保持しているのに対し、あなたは7枚、グリードの意思が宿ったコアメダル1、2枚でも抜ければすぐにグリードとなってしまうのですから。』

火野映司は、体内にコアメダルを持ちながらも、人間として居続けられている特殊な存在である。

大きな要因として、彼自身が欲望によってグリード化を抑えつけていることと、憑依しているグリード達がそれに加勢している。

グリードとは、本来欲望の暴走を満たすためにしか動けないものなのであるが、紫のメダルの特性である「無」によってその欲望が緩和され、そのメダルの副作用を抑えるためにグリードが憑依している、いわば火野とグリードの関係は、「持ちつ持たれつ」といった表現が適切なのだ。

しかし、グリード化という力を無理やり押さえつけているのが現状、引つ張り続けたゴムがその分力を発生させるように、負担をかけ続けたグリード化の波は、一旦解放されてしまったら、その抑え続けた時間分、一気に進行してしまうのだ。

真木が心配しているのはそれで、小さなきっかけ、一定の紫のコアメダルの力を使ってしまった場合もそれとなるので、火野は力をセーブしているの。

例として、ひったくり犯を拘束するときに、本来、メズールの水流がなくても、空気中の水分から氷結させることができる、しかしそれはメダルの力を行使してでの行動、力をむやみに使用した場合の危険を考え、映司はメズールの水流を使い、それに便乗するように軽い行使を行った。

そういった判断をしていくしかないほど、火野のグリード化の危険性が跳ねあがっており、真木は危険視しているのだ。

少しの談話を行った後、話は真木側の居候の話へと移った。

「そういえば、チエト君の様子はどうですか？」

『彼は相変わらずです。この前は研究室を半分荒らされて少々困りましたが・・・、話しますか？』

「はい、お願いします。」

火野が笑顔で返事をする、真木は静かに目をつぶる。

その刹那、真木の左手が、一瞬にして異形の者へと変化したのだ。赤を基調として、どちらかと言えば美しい、というよりふてぶてしい印象を受けるそれは、アंकの右手の写し身、それもそのはず、その正体はアंकの他のタカメダルに宿った、もう一人のアंकの人格なのであるから。

『映司だ、久しぶり。』

「うん、久しぶり。ほら、アंकもなんか言ったらどうだよ。」

「どうもまだ慣れないんだよ。俺の左手が勝手に話すのは。」

『アंकも、どう？元氣だった？』

「・・・ふん。まつ、久しぶりにアイスを食べたから機嫌はいいがなあ。」

800年前と現在、とあるきっかけで生まれたアंकのもう一つの人格、他のグリードがいなく、真木のグリード化を抑える人員を探した結果、そのもう一人のアंकに一任したのだ。

真木は3枚のメダルという、火野よりは比較的少ない負担で済むため、もう一人のアंक、チェト1人に任せ、ひとまず成功した、その後、博識で、知識量豊富な真木に感化され、アंक以上に賢くなっているのはここだけの話である。

しかし、右手だけの異形と、左手だけの異形が話す光景はなんともシニールで、伊達は「なんとも面白いねえ」と言いながらセルメダルの整理をしていた。

話はまた移り変わり、これからの予定について真木と火野は話していた。

地球での仕事に踏ん切りをつけ、ある程度の準備を済ました後に、ここミッドチルダに真木は住居を置くらしい。

『僕自身、科学者としてそちらの技術には興味がありますからね。それに、君の体の検査や、バースの調整も行わなければいけないですし・・・。』

「お待ちしてます。チェト君も、また今度会おうな。その時はいっぱい遊んでやるから。」

『うん！楽しみにしてるよ、みんな。カザリも、またチェスをしようよ。』

「今度は負けないよ。こっちだって意地があるからね。」

再会の契りを軽く交わし、映司は通信を遮断した。

こうして、悪と正義が動く裏で、一時の平穏を噛みしめるものもある。

青年が守った平和、人、そして異形であるグリード。

「自分のやったことは、やっぱり間違ってた……。」

こうして、楽しそうなグリードの姿を見ると、映司は心の底から自分の為したことへ誇りを持てるのだ。

・・・しかし、平穏も、永遠という言葉はない。

おもむろに昼食を食し、こちらの食文化に理解を深めていた火野と伊達、早速食後のアイスを要求してきたアंक他のグリード一行に、ゴリラカンドロイドの鳴き声が聞こえた。

このカンドロイドが知らせるのは、グリードやヤミーの出現・・・この世界での初仕事の報せであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9001x/>

OOO Cross Story`s ~ Another World`s/Cross Greed`s ~

2011年10月26日08時10分発行